

おわりに

本科研では、帝国日本の版図拡大と教員ネットワーク形成との関係はいかなるものであったのか検討してきた。分析対象は、第一に「外地」に赴任した広島高等師範学校出身者、第二に満洲国の中等教員に関する政策、第三に広島高等師範学校校長などを勤めた幣原坦、第四に中国大陸と日本の「新教育」との関係である。それぞれの研究成果については各章に譲り、ここでは本科研で達成したことと、今後の課題についてまとめる。

『広島高等師範学校一覧』に記載された卒業生の勤務先をデータベース化し、1938年までという限界があったが、明治期から日中戦争勃発前にかけての広島高等師範学校出身者の「外地」への赴任を通して教員ネットワークの形成過程を分析した。この作業を通して「内地」と「外地」を地域横断的に捉える視座を提示することができた。こうして、帝国日本の勢力圏内において広島高師の卒業生ネットワークが形成されていく状況を具体的に明らかにすることができた。本科研の知見によって、これまで地域史としてそれぞれの研究分野で完結しがちであった研究状況に風穴を開けることができたと考える。

今後の課題としては、まずは検討できなかった地域を補うことである。すなわち、広島高師出身者が比較的多かった台湾や樺太を分析対象に加え、地域横断的検討をさらに進めたい。次に、1940年代以降の状況について検討することである。杉森論文によって外国及外地派遣教員制度が1940年代に本格化し、「内地」の教員養成校と「外地」とは切り離すことができない関係であったことが明らかとなった。こうした教員養成をめぐる「内地」と「外地」との関係は、日本の敗戦に伴う帝国日本の崩壊によってどのように変化したのか。それとも連続した側面があったのか。今後は、戦後教員史を視野に入れた上で、教員ネットワークの再編を検討したい。